

第6回レフェリーアカデミー報告書 梶原康司（福岡県協会）

【1】 ジュニアリーグを担当して

私は、男子ジュニアリーグ決勝（北陸電力ジュニアブルーロケッツ×琉球コラソジュニア）の試合を担当した。小学生の試合を担当するのはほぼゼロに近く不安も大きかったため、試合の担当が発表される前から競技規則（Jクイックハンドボール）の熟読・理解、動画サイトで小学生の試合をみるなど入念な準備を進めた。同時にペアの荒木と、小学生に求められる笛・立ち振る舞いを二人で話し合った。その際、特に悩んだことが接触によるアドバンテージと罰則をだす基準である。小学生というカテゴリーでは、最大限の安全確保がレフェリーには求められる。怪我人を出さないよう心掛け、試合に臨んだ。

実際に試合を吹いてみると、Jクイックハンドボールの展開の早さに驚いたが、徐々に慣れていった。高いDFをしてくることはあらかじめ荒木と予想していたので、事前に話していたこととインカムでコミュニケーションをとることで、領域に関してはうまく分担できたと思う。しかし、試合後ペアの荒木と反省をし、でた反省点が2つある。

1つ目は、接触によるアドバンテージである。すぐにフリースローの笛を吹いたほうがいいのか、アドバンテージをみたほうがいいのか悩む場面がいくつかあった。あまりにアドバンテージを見過ぎるとDFの違反や怪我につながりかねないが、OFのボールとして生きている場合に悩むことが多かった。これを改善するには、より小学生のハンドボールを知ることと、何より予測が必要だと感じた。

2つ目は、パッシブプレーの予告合図タイミングである。今回のJクイックハンドボールの場合、ゴールイン後のゴールキーパーを吹いた時点で攻撃は始まっている。決して攻撃組み立て段階に入った時点から、攻撃が始まっているわけではない。今回の試合の場合、北陸電力ジュニアが攻撃の組み立てまでかなり時間を要していた。その時点でパッシブプレーの予告をしてあげることで、よりスピーディーな試合展開になったかもしれない。パッシブプレーの予告合図をタイミングよくするには、ハンドボールの試合の流れをすることが大事だと感じた。

【2】 プレーオフを観戦して

初めて生でプレーオフを観戦して、まず私がレフェリーとして見習うべきだと感じたことは、トップレフェリーの立ち振る舞いである。ウォーミングアップ、選手・チームスタッフとのコミュニケーション、選手の出迎え方など、どれ1つとってもレフェリーとして毅然とした態度で、スマートな立ち振る舞いであった。

また、試合開始のずっと前から大会運営の方々が大会の成功のために入念な準備やリハーサルを行っている様子を見て、改めて多くの方々に支えられて大会は成り立っていることを実感した。レフェリーも彼らと同様に大会を素晴らしいものにするために、陰の演出者として準備を怠ってはいけない。

プレーオフは国内最高峰の大会であるため、会場の観客だけでなく、ネット等から観戦する人も多い。観客にはハンドボール玄人もいれば、初めて見る人もいるであろう。誰もが見ても納得・理解できるような表現力やボディランゲージがプレーオフを任されるようなトップレフェリーには求められると思ったと同時に、まだまだ日本ではマイナースポーツであるハンドボールを、多くの人に知っていただく、興味を持っていただくためにレフェリーも一役担っているのではないかと思った。現在、ハンドボール本来の面白さであるスピーディーかつ激しいボディコンタクトを引きだそうとするモダンハンドボールが謳われているが、自分自身あまり理解できないでいた。しかし、今回トップのレフェリングを間近で見ることで、モダンハンドボールというものが少しずつ理解できたうえに、時の流れにより変換するハンドボールに対して、レフェリーも柔軟に対応していく必要があると感じた。大会・カテゴリーによって求められることは様々であるため、臨機応変に対処できる柔軟性を身につけていきたい。

【1年間の学びについて】

今年度途中から参加させていただき、参加するたびにハイレベルで恵まれた環境で学んでいることを痛感した。途中から参加であったが学ぶことは計り知れないほど多く、ご指導してくださる講師の方々のお言葉はどれも貴重で、勉強になった。誰もが参加できるわけではないレフェリーアカデミーという特別事業で学んでいるということは、結果を残したり、レフェリーとして何かしら貢献していかなければならないという使命感を感じた。

女子のアジア選手権やプレーオフを観戦すると、より一層協会指名レフェリーや国際レフェリーへの意欲が増した。現在も現役で活躍されている国際レフェリーの方々から指導

していただけることは、私にとってとても刺激的で光栄なことである。これらの時間を一瞬たりとも無駄にはせずに意欲的に取り組んでいきたい。アカデミーで学んだことを地元で取り組んでみたり、試してみたりと良いサイクルができたいたので、継続していく。何より地元での活動が大事なので、謙虚に真摯に努めていきたい。

最後に、多くの方々に支えられていることへの感謝を忘れずに国際レフェリーを目指していく。